

図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2011. 3.22

主な内容	頁
『FDに関する参考図書紹介』（寄稿）・高等教育開発官	安岡 宏………… (405)
教官著書の紹介……………国防論教育室	田中 誠………… (407)
教官共訳書の紹介……………体育学教育室	小西 優………… (408)
展示コーナー『防大総合情報図書館に残るGHQ没収図書－軍事・国防分野を中心に－』	………… (409)

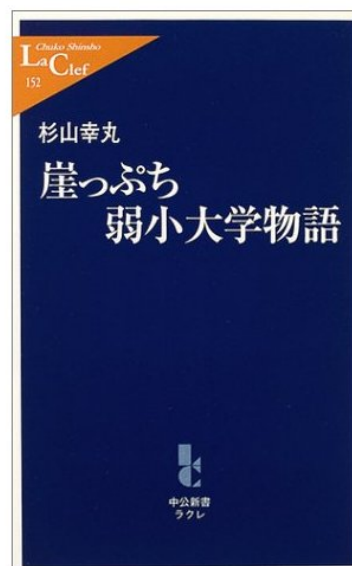
『FDに関する参考図書紹介』

高等教育開発官

安岡 宏

杉山 幸丸 著 「崖っぷち 弱小大学物語」
中公新書クラレ

かつて大学では難解な講義が行われ、またスマートに書かれた教科書は、行間を読まなくては理解することが出来なかった。狭き門をくぐり抜け、大学での勉強を志した学生は、授業についていこうと必死に勉強した。一方でろくに授業に出席せずとも満点を取る強者もいた。1975年に出生率が2.0を割り込んで以来、少子化はどんどん進行している。同時に、1980年代後半のバブル経済に乗じて、また1991年の大学設置基準の緩和によって、学部



や大学が数多く新設された。いまや欲を言わなければどこかの大学に入ることができる時代となった。このような状況で高学歴化も進んでおり、大学進学率は上昇を続けている。近ごろは「とりあえず」や「何となく」大学に進学するものも多くなっている。

京都大学霊長類研究所で所長を務めていた著者は1999年に退官し、大学淘汰にさらされている某私立大学に再就職した。そのなかで奮闘した体験を綴ったのが本書である。本書は教官の方々へ推薦するものであるが、学生諸君にとっては今一度、防大で何を学ぶのかを考える機会になれば幸いである。そして終盤に触れられているリーダーシップ論は参考になるであろう。

一流大学から私立大学への転身は、大きなカルチャーショックであったことは容易に想像できる。しかし何をしなければならぬかを見定めた著者は様々なアイデアを出し、それらを実行していくのである。結果を信じて推し進めていく力は、世界的に著名な研究者であることを改めて感じさせる。

本書は2004年に執筆されており、近い将来に大学全入時代に突入することを予想している。2007年には受験者数が総定員数と一致することが、本書に限らず多くの資料の中で指摘されてきた。そういう状況にある現在、既に募集停止に至っている大学や学部、短大、大学院がはじめていることは事実である。企業と同じように、大学も様々な努力を続けてはじめて生き残ることができるのである。本書では著者が務める私立大学での数々の挑戦が紹介されている。

本書ではこの状況がFランク大学の出来事としているが、少子化が進んでなおかつ目指す大学をねらう浪人生が発生することにより、玉突き現象のように中位ランクの大学でも同様の深刻な状況に至ることになる。現在は、

国立大学法人をはじめ上位私立大学でも教育改革や経営改革が進められている。こんな中、防大において今までと同じ教育を続けていて良いはずがない。ただし防大は一つだけ大きな違いがある。著者が勤める私立大学や広く国立大学法人・公立大学法人は学生に「教育」というサービスを提供するわけであるが、防衛大学校ではそうではない。であるからこそ防大では学んでもらわなくてはいけないのである。

本書では、社会が求める人材として(1)倫理観と使命感をもって行動できる、(2)常識が理解できる、(3)集団の中で仕事ができる、(4)自分自身で考え判断し、独創性を発揮できることを挙げている。そして大学教育の目的は、広い視野に立って行動でき、豊かな人生を過ごす知識を得ることと記している。防大の教育理念と大きく違わない。それどころか立派な自衛官像である。社会人の規範となるべきであるので当然である。異なる点は、より厳しく求められることであろう。本書はそういう観点から大いに参考になると思う。

本書は指摘している。一般にいうFDは教育効果向上のための手段の一つであって、万能の特効薬ではない。教育技法で解決するのであれば予備校の教師を引き抜いてくれば良い。教員は一流の研究者でなくてはならない。そして講義だけでなく、ゼミや卒業研究で物事に取り組む姿勢やものの考え方、学問に対する熱意を伝えることこそ大学教育の本命であると記している。著者はただただ教育に対し謙虚であり、学生の目線に立とうとしている。これが究極のFD活動でありFDの思想のように思う。これから行なわれようとしている防大の改革も、世の中の変化から必要に迫られている。カリキュラムの改正はもちろん重要であるが、教官そして事務官一人一人の教育に対する考えが教育効果として最も大き

く働くと思う。FD 委員会は発足以来、教育効果向上を掲げて活動が続けているが、行き着くところは教官と事務官の熱意であると考えられる。

本書は一見暴露本のようにあり、学生への愚痴、大学経営者への不満、親への愚痴が満載である。経営者や親の理想像をもち、学生へ愛情をもって接し、学生を第 1 に考えている現れであろう。

本書は主観的な論調であるが、客観的・分析的な書物としては以下の書を推薦する。

諸星 裕 著 「消える大学 残る大学」 集英社



～～～教官著書の紹介～～～

『トピックからはじめる法学』

所 属

防衛大学校防衛学教育学群

共 著 者

国防論教育室

准教授 田中 誠 (たなか まこと)

成文堂 (2010 年)



本書は、①学部を模索している受験生、②法律系学部への入学決定者、③法律系学部への入学当初の学生、④法の世界に触れたい一般・社会人を対象として、読者が身近な話題から法学へアプローチできるための新しいタイプの入門書です。抽象的に法学を説明するのではなく、興味を持てる話題をアカデミックに提供するという方針で刊行されました。法学上のカテゴリーを前提とせず、読者と社会との関わりを中心に、「法学の世界へ」、「大人になるということ」、「社会との接点」、「グローバル社会へ」という 4 つのパートの中に以下の 37 の話題を用意しています。

Part1「法学の世界へ」では、①「社会のあるところに法あり」ということ、②日常生活に法がどのように関わるべきなのか、③「法律なければ犯罪なし、法律なければ刑罰なし」という原則を扱います。

Part2「大人になるということ」では、①未成年者による犯罪行為の取り扱い、②未成年者の医療に対する同意の問題、③民法における大人と子どもの境界線、④憲法の国民民主

権原理、⑤「責任なければ刑罰なし」という原則を扱います。

Part 3「社会との接点」では、(1)暮らしと法 (①生活と行政、②お小遣い、③著作権、④離婚した親と子どもの関係)、(2)トラブルと法 (①クリーニング事故、②少額訴訟制度を悪用した架空請求、③労働災害(アルバイト中のケガ)、④振り込め詐欺、⑤犯罪の被害を受けた場合)、(3)社会問題と法 (①臓器移植、②薬の安全と行政の賠償責任、③医療過誤における被害者の救済、④なぜ冤罪が発生するのか、⑤ドメスティック・バイオレンス)、(4)裁判と法 (①裁判員制度、②民事裁判、③「訴訟小国」日本と「訴訟大国」アメリカ)、(5)仕事と法 (①働きながら子育てをするための法制度、②突然解雇された場合、③会社の乗っ取り、④独占禁止法、⑤法令遵守経営(コンプライアンス経営)、⑥倒産手続)を扱います。

Part 4「グローバル社会へ」では、①なぜ「戦争」にはルールが必要なのか、②海洋油濁汚染と賠償・補償制度、③国際貿易のルール、④外国に関係する生活関係(民法・商法)、⑤世界をひとつにまとめる方法を扱います。

私の前職は、陸上自衛隊小平学校の法務教官でした。法務教官室では、自衛隊で勤務する法務官等(リーガルスタッフ)及び賠償補償専門官を育成するとともに、各学校等の法令教育担当教官及び各部隊の訓練基幹要員に対して作戦法規教育を行う能力を付与しています。国際法(国際人道法を含む)、民法、刑法などの教育を担当した私の経験から、『トピックからはじめる法学』は、法学の初心者にとって最適な教材と思います。

防大生は任官後、指揮官や幕僚(リーガルスタッフに補職されなかったとしても)を必ず経験します。日常の隊務では、多種多様な法律問題を的確に処理する必要があります。

悩みを抱えた隊員が相談に来た時に、法的根拠に基づいたサービス指導ができれば、信頼される幹部となるでしょう。戦場では、指揮官は、国際人道法を知らないために違法な命令を下せば、部下を道連れに戦争犯罪人になります。平時であると戦時であるとを問わず、いざというときに役に立つのが法的識能です。法律を学ぶメリットとしては、①法令を遵守し、部隊の規律を維持する確固たる正義感、②法律上の要素を正しく分析する論理的な思考能力、③常識に基づく法的バランス感覚などの資質の涵養を挙げることができます。多種多様な身近な話題を糸口にして、読者が法律に興味を持っていただければ幸いです。

～～教官共訳書の紹介～～

『スポーツ生理学からみた

スポーツトレーニング』

所 属

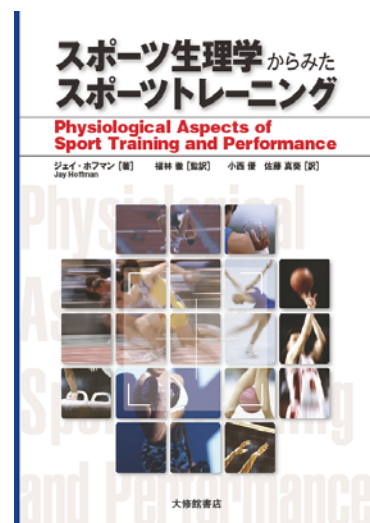
防衛大学校総合教育学群

共 訳 者

体育学教育室

准教授 小西 優(こにし ゆう)

大修館書店(2011年)



近年、年齢や性別を問わず、多くの人がスポーツに注目し興味を持つようになってきている。その中で競技力を向上させるためには科学に裏付けられたトレーニングが不可欠であることを多くの人が実感している。現場の指導者が科学的な根拠に基づいた効果的なトレーニングを施すことが競技力向上の近道であるということは周知の事実である。ところが最新の科学的知識が、実際のスポーツ現場に必ずしも正しく反映されていないというの、また現状である。特に、近年ではインターネットによる情報の氾濫等が原因となり、場合によっては根拠のない誤ったスポーツ科学に関する情報が、浸透している場合すらある。それに対して本書は、膨大な量の科学論文を引用し、科学的根拠に基づいた正しいスポーツ科学を基礎からスポーツ現場への応用の仕方まで学べる構成となっており、現場と研究室との間にあるギャップを埋め合わせることが可能な内容となっている。実際に訳者である私自身もスポーツ医科学の科学者でありながらスポーツ現場での活動を行っているが、翻訳を進めながら「なるほど」と納得させられる点が多々あった。本書の原文である "Physiological Aspect of Sports Training and Performance" という書の著者の経歴をみると、彼は、元々プロのアスリートとして活動していた Jay Hoffman という運動生理学者である。しかも、彼は現在も研究者という立場の傍らアスリートの指導も行っている。このような選手や指導者としての視点があるからこそ、科学者と現場の選手やスポーツ指導者との間のギャップを埋めるような内容を執筆できたのであろう。

本書は、第 I~V 部の 5 つセクションで構成されているが、前半部分で運動生理学や生化学、医学に関する基礎的な専門知識を学習し、後半部分では、これらの専門知識を実際

のスポーツ現場へ応用するための内容を中心とした構成となっている。第 I 部では、トレーニングを科学的に捉えるためには不可欠である科学的基礎知識に関して初めてスポーツ科学を学ぼうとする人達にも理解できるよう段階的かつ詳細な説明を行っている。さらに、このセクションでは、筋骨格系、内分泌系、循環器系、神経系、免疫系などの内容に分け、それぞれの分野での最先端の科学論文を引用しながら解説しており、そして、第 II 部では、これらの専門知識を更に発展させ、レジスタンストレーニング、有酸素系トレーニング、無酸素系トレーニング、コンカレントトレーニング、プライオメトリクスなど、各々のトレーニング形態におけるトレーニングプログラムの組み方とその科学的根拠に関して解説をしている。更に第 III、IV 部では、トレーニングや競技力に大きな影響を及ぼす要因である栄養、水分摂取、エルゴジェニックエイド、環境要因(暑熱環境、寒冷環境、高所環境)のような特殊環境)に注目し、実際のトレーニングや競技力にどのように影響するのかを最新の科学論文の結果を踏まえながら解説している。そして第 V 部では、糖尿病や運動誘発喘息など、スポーツパフォーマンスに影響を及ぼす可能性のある疾病やオーバートレーニングに注目し、このような疾病を持っている人がスポーツを行うに際してどのようなリスクをもち、またこれらの疾病に運動がどのように効果的であるかも解説している。

このように本書は、スポーツやトレーニングに関する内容を一冊の本にまとめ、スポーツ科学をより総合的に理解することができるように構成されている。スポーツ科学を学ぶ学生ばかりでなく実際のスポーツ現場で指導を行っている指導者や選手にとっても有用な書であり、選手の競技力向上に必要な知識を得るための参考書として使える書といえる。

また、本書では、米国公認アスレティックトレーナーでもある防衛大学校准教授の私が、第 I、II、IV、V 部を担当し、栄養関係の第 III 部に関してのみ栄養学の専門家である森永乳業の栄養科学研究所元研究員の佐藤真葵氏を招き翻訳を行った。このように、訳者の人数を最小限に抑え、用語や表現に一貫性を

持たせることにより、過去の訳書にくらべ格段に読みやすくなっている。更に監訳には、現在、日本サッカー協会理事・スポーツ医学委員長スポーツ医学界の第一人者である福林徹先生を招いており、非常にクオリティの高い訳本になっている。是非多くのスポーツ関係者に読んでいただきたい書である。

展示コーナーの紹介

「防大総合情報図書館に残る GHQ 没収図書－軍事・国防分野を中心に－」

GHQ(連合軍最高司令部)は、昭和 21 年から 23 年にかけて、戦前・戦中の合計約 7,000 件の図書を「宣伝用刊行物」として没収対象に指定しました。これらは書店や出版社などを対象にして没収作業が行われました。

これらの没収対象図書のリストは「総目録 GHQ に没収された本」(占領史研究会編)として平成 17 年に単行本として出版されました。当図書館では、このリストに載せられた約 7,000 件について所蔵図書を調査したところ、多数の図書が確認できましたので、そのうち、没収後復刻されたものと、「軍事・国防」分野のうち戦意高揚的なもの、歴史的な価値があると思われるものといった 3 つの区分を設けて展示しました。それぞれの区分の展示図書は以下の通りです。

これらは、戦後の占領政策の一端を伝える図書の数々と言えるでしょう

① 没収後復刻されたもの

書名	著者/編者	出版年	復刻年
國體の本義	文部省	1937	2003
戦時経済国策大系 第 5 巻 戦時経済と燃料国策	東栄二著	1941	2000
数字より見たる世界と東亜	東亜研究所編	1942	2007
印度・ビルマの教育・植民政策	吉田實著	1942	1998
国防哲學	養田胸喜著	1941	2007
国防大事典	櫻井忠温著	1932	1978
世界興廢大戦史 東洋戦史 第 26 巻 太平洋侵略史 (1)～(6)	仲小路 彰著	1942-43	2010

② 「軍事・国防」分野のうち戦意高揚的なもの

書名	著者/編者	出版年
世界の恐威日本軍	多賀宗之著	1942
皇國の軍人精神	荒木貞夫述	1933
軍神廣瀬中佐傳	有馬成甫著	1935
嗚呼！南郷少佐	長倉栄著	1938
聖将東郷と靈艦三笠	尾崎主税著	1935
支那事變と無敵皇軍	宇都宮謙編纂	1937
戦錬記 神武の兵	北村一夫著	1943
戦陣訓と日本精神	岡田久司著	1942
活機戦 2 上海事変	佐藤庸也著	1943
海軍魂：日本海軍はなぜ強いのか	植村茂夫著	1942

③ 「軍事・国防」分野のうち歴史的な価値があると思われるもの

書名	著者/編者	出版年
現代心理学 第7巻 国防心理学	小保内虎夫[ほか]著	1941
空襲と国際法	田岡良一著	1937
戦争経済の構造 上巻	日下藤吾著	1943
戦争と人口問題	郡菊之助著	1941
国防原論	佐藤六平著	1930
軍事科学講座 第1篇 戦略・戦術論	西田恒夫著	1932
軍事科学講座 第2篇 軍事政策	岡田銘太郎著	1932
軍事科学講座 第6編 空中戦	大場弥平著	1932
国防科学叢書 22 防空	難波三十四著	1942
國家總動員法令集	企画院編	1940
国民防空叢書；1 防空総論	館林三喜男[ほか]著	1943
空襲と都市防空	大阪市教育部編	1943
戦時物資統制法	清水兼男著	1942
戦争史概観	四手井綱正講述	1943
海軍陸戦隊上海戦闘記	有馬成甫著	1932
欧州大戦史の研究 第2巻	石田保政述	1937



編集後記

今後も本校総合情報図書館において、蔵書展示等を実施していく予定です。より多くの利用者の方々に見学していただけるよう、総合情報図書館員一同お待ちしております。

編集庶務担当

NADAL Bulletin Vol. 25, No. 2

防衛大学校図書館だより 2011. 3. 22

発行及び発行人

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校総合情報図書館 Tel. 046-841-3810

館長 鎌田 伸一

編集委員

新井 重信 (体育学教育室)

糸賀 紀晶 (航空宇宙工学科)

講初 靖 (国防論教育室)

編集庶務

内藤 明生 (総合情報図書館事務室)

連絡先

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校 総合情報図書館事務室

「図書館だより」事務局

Tel. 046-841-3810 FAX. 046-843-3818
